になり、リスクマネーを出したのは外資系ばかり。ゴルフ場は、いわゆる〝ハゲタカ〟の練金の場と化したわけです。大手外資はゴルフ場を二束三文で買い集め、合理化し、時を見てその株式を高値で上場させて莫大な利益を手にする。それで、ゴルフ場が生き残ったという見方はあるにせよ、人一倍ゴルフ好きで、拝金主義嫌いの僕にとっては、座視できない事態です。多くが「しょうがない」とあきらめるなか、僕は、さらに闘いに挑むようになりました。

●

こんな数字がある。2008年の段階で、法的整理が起こったのは、日本のゴルフ場の3分の1近い730以上のコース。そのなか、アコーディア・ゴルフとPGM（パシフィックゴルフマネージメント）という外資ファンド絡みのゴルフ場経営会社が、所有に至った数は実に約250カ所。その多くが、会員や従業員をそっちのけにした財テク劇に終始したという。

●

ゴルフ場に限らず、グローバルな大資本の容赦ない錬金術の前に、弱者が食い物にされてきた。バブル崩壊後の不動産もそうだし、金融機関もそう。ハゲタカに手玉に取られるのが不愉快で、僕はゴルフ場を舞台に30年近く闘ってきたけど、何度悔しい思いをしてきたことか。ゴルフ場争奪戦において、GS（ゴールドマン・サックス）に屈せず、完全株主会員制のゴルフ場に再生させた「浜野ゴルフクラブ」のような勝利もあったが、もちろん逆がほとんど。法人が高額な会員権を所有するゴルフ場などは、外資はそこに食い込むから、結果、会員が分断されて負ける。そんな煮え湯を飲まされたことも度々です。一度の勝利に、三度のボロ負け。そんな繰り返しでしたねぇ。

「できない」「勝てない」と言われると、むしろ燃える。そこから仕事が始まるという感覚が、僕にはあるから

横浜CCのクラブハウスに飾ってあった、この絵画を気に入り、所有者であった総支配人におねだり。念願かない、プレゼントされた

所属クラブ袖ヶ浦CCの会報『袖ヶ浦』に寄稿した際の誌面。ゴルフ関連の著書多数。ゴルフ雑誌数誌で連載記事執筆を担当した

アマチュアゴルフのトップ・阪田哲男氏（前列右から3人目）に弟子入りすべく袖ヶ浦CCに入会。関東倶楽部対抗の決勝で優勝メンバーとなった（前列左から2人目が西村氏）。この写真は、雑誌の表紙を飾ったもの。出典：『KGA GOLFER'S NEWS』（関東ゴルフ連盟発行）No.110 2012年秋号